

宗盛「熊野來りてあらばこなたへ申し候へ。

従者「畏つて候。

朝顔「夢の間をしき 春なれや

さく頃花を たづねん

これは遠江の國池田の宿。長者の御内に仕へ申す。朝顔と申す女にて候。さても熊野久しく都に御入り候が。この程老母の御痛はりどて。度々人を御のぼせ候へごも。更に御下りもなく候ほどに。此度は朝顔が御迎にのぼり候。

この程の

旅の衣の 日も添ひて

幾夕暮の 宿ならん

夢も數ろふ 假枕

明かし暮らして 程もなく

都に早く 着きにけり

急ぎ候ふ程に。是は早都に着きて候。是なる處が熊野の御入り候處にて有りげに候。まづ案内を申さばやと思ひ候。いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が参りて候るれく御申し候へ。

熊野「草木は 雨露のめぐみ

養ひ得ては 花の父母ふぼたり

況んや人間に 於てをや

あら御心もとなや

何とか御入り 候ふらん

朝顔「池田の宿より朝顔が参りて候。

熊野「なに朝顔と申すかあらめづらしや。さて御痛はりは何と御入りあるぞ。

朝顔「以ての外に御入り候。これに御文の候御覽候へ。

熊野「あら嬉しやまづ〜御文を見うするにて候。あら笑止や。こ

の御文のやうも頼み少なう見ねて候。

朝顔「さやうに御入り候。

熊野「此上は朝顔をも連れて参り。又此文をも御目にかけて。御暇を申さうするにてあるぞこなたへ來り候へ。いかに申し上げ候。老母の痛はり以ての外に候とて。此度は朝顔に文をのぼせて候。びんなう候へどもそと見げざん参に入れ候ふべし。

宗盛「何と古里よりの文と候ふや。見るまでもなしうれにて高らかに讀み候へ。

熊野「甘泉殿の 春の夜の夢

心を碎く 端となり

驪山宮の 秋の夜の月

終なきにしも あらず

末世一代 教主の如來も

生死しやうじの掟をば 遁れ給はず

過ぎにし如月きよつきの頃 申し、如く

何とやらん 此春は

年ふりまさる 朽木櫻

今年ばかりの 花をだに

待ちもやせじと 心よわま

老の鶯 逢ふ事も

涙に涸ぶ ばかりなり

唯然るべくは よきやうに申し

しばしの御暇を 賜はりて

いま一度まみね おはしませ

さなまだに

親子は一世の 中なるに

同じ世にだに 添ひ給はずは

孝行にもはづれ 給ふべし

唯かへすべし

命の内に 今一たび

見まゐらせたくころ 候へとよ

老いぬれば去らぬ別の 有りといへば

いよく見まく ほしき君かなと

古言までも 思出の

涙ながら 書きとむ

地誌 とも此歌と 申すは

在原の 業平の

ろの身は朝あさに 隙なきを

長岡に 住み給ふ

老母のよめる 歌なり

さてころ 業平も

去らぬ別の なくもがな

子代もと祈る 子のためと

よみし事こそ あはれなれ

熊野 今はかやうに 候へば

たん暇を たまはり

東あづまに下り 候ふべし

宗盛「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら。此春ばかりの花  
見の友。いかでか見捨て給ふべき。」

熊野「たん言葉を返せば恐なれども。花は春あらば今に限るべから  
ず。」

これはあだなる 玉の緒の

長き別れと なりやせん

唯たん暇を 賜はり候へ

宗盛「いや／＼左様に心弱き。身に任せてはかなふべし。いかにも  
心を慰めの。花見の車同車にて。共に心を慰まん。」

地蔵「牛飼車寄せよとて

是も思の家の内

はや御出と すゝむれば

心は先に 行きかぬる

足弱車の

力なき花見 なりけり

熊野「名も清き

水のまに／＼とめくれば

地謡 川は音羽の山ざくら

熊野 東路とてもひがし山

せめてうなたのなつかしや

地謡 春前に雨あつて花の開くる事早し

秋後に霜なうして落葉おろし

山外に山あつて山盡きす

路中に路多うして路きはまりなし

熊野 山青く山白くして雲來去す

地謡 大樂しみ人憂ふ

これ皆世上の有様なり

誰か謂つし春の色

げにのどかなる東山

四條五條の橋の上

老若男女 貴賤都鄙

色めく花衣

袖をつらねて行末の

雲かと思ねて八重一重

さく九重の花ざかり  
 名に負ふ春のけしきかな  
 川原おもてを過ぎゆけば  
 急ぐ心の程もなく  
 車大路や六波羅の  
 地藏堂よと伏し拜む  
 熊野「観音も同座あり  
 闍提救世せんたいくせの方便あらたに  
 たらちねを守り給へや

地蔵じざう「げにや守りの末すぐに  
 頼む命は白玉の  
 愛宕おたごの寺も程過ぎぬ  
 六道の辻とかや  
 熊野「げに恐ろしや此道は  
 冥途に通ふなるものを  
 心ぼろ鳥部山  
 地蔵「煙の末もうすがすむ  
 聲も旅雁の横たはる

熊野「北斗の星の 曇りなき

地蔵「御法の花も 開くなる

熊野「經書堂は 是かごよ

地蔵「うのたらちねを 守るなる

子安の塔を 過ぎゆけば

熊野「春の隙ゆく 駒の道

地蔵「はや程もなく 是ぞ此

熊野「車やごり

地蔵「馬ごりめ

こゝより 花車

おりゐの衣 播磨瀉

飾磨しからの徒歩路かちぢ 清水の

佛のねんに 念誦して

母の祈誓を 申さん

宗盛「いかに誰かある。

從者「ねんに候。

宗盛「熊野は何くにあるぞ。

從者「いまだ御堂に御座候。



宗盛「何とて遅なはりたるぞ。急いでこなたへと申し候へ。」

従者「畏つて候。いかに朝顔に申し候。はや花のもとの御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。その由仰せられ候へ。」

朝顔「心得申し候。いかに申し候。はや花のもとの御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。」

熊野「何とはや御酒宴の始まりたると申すか。」

朝顔「さん候。」

熊野「さらば参らうするにて候。なふく皆々近う御参り候へ。あ

ら面白の花や候。今を盛と見わて候ふに。何とて御當座なごをも遊ばされ候はぬぞ。

げにや思 内にあれば

色外に あらはる

地謡「よしや由なき世の習

嘆きても又 餘りあり

熊野「花前に蝶舞ふ 紛々たる雪

地謡「柳上に鶯飛ぶ 片々たる金

花は流水に随つて 香の來る事疾し

鐘は寒雲を隔て、聲の到る事遅し

清水寺の 鐘のこゑ

祇園精舎を あらはし

諸行無常の 聲やらん

地主権現の 花の色

沙羅雙樹の 理りなり

生者必滅の 世の習

げにためしある よそほひ

佛も本は 捨てし世の

半は雲に 上見ぬ

鷲の御山の 名を残す

寺は桂の 橋柱

立ち出で、 峰の雲

花やあらぬ 初櫻の

祇園林 下川原

熊野南を遙に ながむれば

地蔵 大悲擁護の 薄霞

熊野権現の うつります

御名も同じ 今ぐまの

稻荷の山の 薄紅葉の

青かりし葉の 秋また

花の春は 清水の

たゞ頼め 頼もしき

春も千々の 花ざかり

熊野「山の名の

音羽嵐の 花の雪

地誌「深き情を 人や知る

熊野「わらは御酌に参り候ふべし。

宗盛「いかに熊野一さし舞ひ候へ。

地誌「深き情を 人や知る

熊野「なふく俄に村雨のして花の散り候ふは如何に。

宗盛「げにく村雨の降り來つて花を散らし候ふよ。

熊野「あら心なの 村雨やな

春雨の

地誌「ふるは涙か 櫻花

ちるを惜しまぬ 人やある

宗盛「よしありげなる言葉の種取り上げ見れば。

いかにせん

都の春も をしけれと

熊野「なれし東の 花や散るらん

宗盛「げに道理なりあはれなり。はや／＼暇取らするぞ東に下り候へ。

熊野「なに御暇と候ふや。

宗盛「中々の事。とく／＼下り給ふべし。

熊野「あら嬉しや 尊とやな

これ観音の 御利生なり

是までなりや 嬉しやな

地謡「是までなりや 尊とやな

かくて都に お供せば

又もや御意の かはるべき

唯このまゝに お暇と

ゆふつけの 鳥が鳴く

東路さして 行く道の

やがて休らふ 逢坂の

關の月さしも 心して  
明けゆく跡の 山見わた  
花を見すつる 雁金の  
ふれは越路 我はまた  
東にかへる 名残かな

(語例)

初花	初櫻	初花ざくら
さくら花	花ざくら	山ざくら
ちご櫻	八重櫻	八重一重

うす花櫻	糸櫻	庭ざくら
彼岸櫻	吉野櫻	遅櫻
さく花	ちる花	にはへる花
花の色	花の香	花のにほひ
花ざかり	眞盛	咲きの盛
盛の花	盛の頃	花曇
花の雨	花の雲	花の山
花の宿	花見の友	花見月
花の影	花の顔	花の唇

つぼみの花	ふゝむ	ふくらむ
火ともす	咲きろむる	開くる
咲きにはふ	紐解く	ほころぶる
あむ	笑みそむる	色づく
けしきだつ	色めく	亂れ咲く
咲き亂るゝ	咲きあまる	こぼれさく
散りろむる	散りかゝる	散りくる
咲き散る	こぼるゝ	落つる
落花	朝ぼらけ	あけぼの

花より明くる	明けろむる	朝日影
朝日にほふ	朝露	露にぬれたる
露おちて	花の寐顔	花の眠り
夕べの花	夕ばね	夕山ざくら
夕べを残す	暮れ残る	夜ざくら
月の夜櫻	おぼろ夜	花もたぼろに
さくご見し間に	一さかり	花も一時
夜の間の嵐	雪と散る	雨のあした
雨の夕べ	雨の日	雨のしづく

ぬれてぞにほふ	雲かあらぬか	霞か雲か
雲の林	なびかぬ雲	遠の白雲
いづくも花の	うす紅に	たゞ白妙に
花の世界	白雲十里	花より花に
空まで染めて	夫も酔へり	松を残りして
心うかるゝ	人の心も	氷に散り淨く
波にたゞよふ	後の上に	嵐なき空に
蝶かと思はれて	花見くらして	あすも又
日毎にめづる	花の別れ	春の形見

◎梅

(作例)

○梅が香

室の梅

謠

曲

波ものどけき 春の夜の  
 月の御舟に さをさして  
 霞む空は おもしろやな  
 かすむ空は たもしろや  
 梅が香の

磯山とほく にほふ夜は

出で舟も 心引く

花ぞ綱手 なりける

この花ぞ綱手 なりける

○梅の花垣

天ざる雪の 古枝をも

猶をしまるゝ 花ざかり

手折りやすると 守る梅の

花垣いざや 圍はん

同  
じ  
く

梅の花垣を かこはん

○心の花

時しも如月

上旬の空の 事なれば

須磨の若木の 櫻も

まだ咲きかぬる 薄雪の

さわかへる波 こゝもとに

生田のおのづから 盛を得て

勝つ色見する 梅が枝

同  
じ  
く



一枝ひらけては 天下の春よと  
軍の 門出をいはふ  
心の花も 咲きかけぬ

(語例)

梅の花	春の初花	まづ咲く梅
春の魁	花の魁	花の兄
百花の先がけ	紅梅	うす紅梅
うす紅	八重	一重
梅が香	梅が枝	梅園

若木の梅	老木の梅	梅さく宿
梅の梢	庵の梅	軒端の梅
好文木 <small>かうぶんぼく 梅の異名</small>	梅さく	梅ちる
咲きにほふ	香にほふ	かをりくる
今を盛	咲きしより	雪とちる
ちりかゝる	こぼれくる	ひらりちらり
ほろりく	折りかさす	折らんとすれば
手折る袂	君に贈る	文に挟む
文の中より	枕にかをる	夜半の枕

旅の枕	明くる妻戸	寐覺の窓
月すむ庭	月清し	月かすむ
ねぼろ月	道ゆく袖に	春風に
かをれる雪	消ぬぬ雪ふむ	遠山里
野寺の庭	野梅	野路の梅が香
鎮守の森	野守が宿	かざしの梅
籠の梅	故郷の軒	夢の名残
下伏し	一夜の宿	なく鶯
鶯さそふ	花のしるべ	昔の春

花のあるじ	夕ばね	たろがれ
疎影横斜 <small>そひやうしや</small>	暗香浮動	花に何く
月か花か	たゝすむ人	柴の戸
友のすみか	船よせて	夜の戸たゝく
風絶わて	公園	神山
木こりの宿	炭やく庵	海人の苦屋
冬梅	寒梅	早梅
冬至梅	冬ながら	雪の内に
雪の下より	雪を凌ぎて	まだきに

春に先だつ

二つ三つ

星かと思わて

星の林

香れる星

◎紅葉

(作例)

○もみぢ

僧 辨 玉

露霜に染めて色こく

秋山に にはへる紅葉

つひに吹く 風や散らさん

散らすらん つらと思へば

手折らんと 陰にはよれど

たわめんと 下枝は取れど

後に来ん 人や恨みん

恨むらん 歎き思へば

たゆたひて 取りては惜しみ

置きては惜しむ

○一木の紅葉

大和田建樹

秋ふけて さびしき庭に

ひとり立つ 紅葉うつくし

龍田姫 ねなじ梢を  
 くれなゐに 口なし色に  
 薄く濃く 色どり分けて  
 誰が秋の 形見とすらん  
 かくばかり 物言はぬ木も  
 露にぬれ 霜に置かれて  
 織り出だす 錦の光  
 かりそめの すさびならめや  
 此紅葉 友とながめて

此窓に 筆とる人よ

きささらぎの 花にもまさる

歌なからめや 文なからめや

○百しほ千しほ

まづく紅葉の 名所々々

かなたこなたに 多けれども

かの業平の 心には

神代も聞かずと 言ひ置きし

名にも龍田の 紅葉の色

謠

曲

初瀬の山は 檜原が木の間に  
 色漏れいづる 村紅葉  
 又は八鹽の 岡のもみぢ葉  
 其ほか高雄 嵐山  
 いろくを  
 四方に染めなす 秋の日の  
 あしたには 雪を時雨れ  
 夕べには 雨とろろぎ  
 このもかもの 草木の

はや下染も 時過ぎて  
 百しほ千しほに 薄き濃き  
 梢の秋は たもしろや

(語例)

- |      |      |        |
|------|------|--------|
| もみぢ葉 | 紅葉の色 | 紅葉の錦   |
| 下紅葉  | 夕紅葉  | 初紅葉    |
| 薄紅葉  | 薄色紅葉 | 山下紅葉   |
| 楓の紅葉 | 柿の紅葉 | ぬるでの紅葉 |
| 薦もみぢ | 薦かづら | はひかゝる  |

柿の紅葉

草の紅葉

雑木林

秋の色

うすくこく

染めつくす

色々

山々

百しほ千しほ

くれなる

うす紅

べにの色

燃ゆるばかり

火の色

燐の光

樺いろ

黄ばむ

口なし色

うつくし

たもしろ

朝日さす

夕日の色に

残る夕日

夕日に染めて

時雨にぬれて

雨晴れて

さよ時雨

秋の時雨

露しぐれ

時雨の秋

梢の秋

分け入れば

山ふかく

谷かげに

谷川に

川づたひ

高き梢

及ばぬ岸

瀧の上

瀧見る山の

たちくる瀧

瀧のしぶき

巖の上

紅葉かたしく

紅葉折り焚く

かざしの紅葉

かざして歸る

山は錦に

赤地の錦

峰も麓も

紅うづむ

霧間に見ゆる

鳥の音さびし

谷しづかなり

夕暮さびし	神の庭木	名もなき楢
名高き寺	住まぬ庵	薪に添へて
柴人	木こり	筏士
散り浮く	水に浮べる	流れゆく
一ひら浮ぶ	汀にとまる	秋風に
風のまに〜	水のまに〜	枝に残れる
芝生に残る	乙女の袖に	ひろふ子供
文に挟みて	歌かきつけて	

◎春の草

(作例)

○蕨ごり

大和田建樹

一

姉と妹とうちつれて

蕨とる 山の麓

いづこなるらん 鳴く雉子の

聲ものごかに 聞わ來ぬ

二

姉は妹を 見かへりて

こちこよと 手して招く

妹は唱歌 うたひつゝ

姉のほとりに 近づきぬ

三

董一ふさ 摘みとりて

むすびたる 髪にさしぬ

花ものいはず 姉妹

ともに唱歌を 續けたり

(語例)

春の野

野邊

野道

野路

野邊の道

道のべ

野に出で、

立ち出で、

野遊

野あるき

摘草

草つむ

つみ遊ぶ

つみためて

手につみて

袂にあまる

諸手にあまる

籠にあまる

籠提げて

つむ手

つむ董

つがぬる

たばぬる

花たば作る

たばねてかざす

かざしに作る

髪にさす



つくし	つくし	つくし摘む
嫁菜	嫁菜つむ	蓬つむ
たんぽ	すみれ	花すみれ
すみれ草	紫すみれ	白すみれ
れんげ花	れんげ草	れんげ摘む
早蕨	初蕨	下蕨
木の下蕨	山下蕨	蕨とる
蕨折る	蕨つむ	蕨とる子
柴採る道	かへるさ	學校がへり

あをく	緑の庭	野邊一面
赤き毛氈	紅かすむ	目もはる
春風ゆるさ	昨日も今日も	うたふ唱歌
鳥も歌ふ	雲雀の歌	姉と別れて
おとっひつれて	友をさうひて	かしこに一つ
摘みくらべする	母のみやげ	遠くに出で
友はいづこ	日は長し	夕暮たろし
なごりをし	春草	若草
まだ若し	緑みじかき	草の若葉

まだ二葉なる 手あさびに

にぎはふ野邊

いざ友よ ぞく來れ

おくるなよ

初蕨つま木にうへて折からの 情も見ゆる賤が山づと(安守)

里の子が友よびかはす聲すなり つめる蕨や手に除るらん(信實)

◎百合の花

(作例)

○白ゆり

大和田建樹

一

朝空に 月ひとつ

ろれよりも 猶白き

百合の花ころ 夏草の

茂みが中に 咲きにけれ

けがれなき ろのにはひ

たが心 たが面影

二

置きあまる 露の玉

それよりも 猶清き

百合の花ころ 朝霧の

晴間にぬれて 咲きにけれ

愛らしき 姿

たゞ似たり 別れし友

(語例)

ゆりの花

花ゆり

白ゆり

姫ゆり

さゆり

ゆり咲く

立てる

なびく

ゆらめく

露もつ

露をかざす

露の玉

露おく野邊

清き

いさぎよき

なつかしき

愛らしき

美しき

けだかき

分け入る

手折る

折りて持つ

草がくれ

草陰に

ぬけいで、

乙女の姿

乳兒の笑顔

水のほとり

谷水

小川の水

吹く風に

風すぎて

松陰

巖の上

岸高し

川のおなた

影うつる

草刈る子

草刈籠

鎌をのがれて

朝露

朝霧

朝月夜

朝風

夕風

夕月夜

瓶にさす

机の上

しばらくは茂き草葉を吹き分けて

風のみせたる姫百合の花

(亮澄)

◎秋の花

(作例)

○一むら薄

謠

曲

名ばかりは

在原寺の跡ふりて

松は老いたる塚の草

是ころろれよ亡き跡の

一村すゝきの穂に出づるは

いつの名残なるらん

草ばうくとして

露しんくと古塚の

まことなるかな古への

跡なつかしきけしきかな

○萩ちる暮

大和田建樹

秋風ふきて 萩ちる暮

一 去年に似たり 静けさは

翠の音いづこ 弾く人いづこ

月は空に 影は庭に

二

雲井のよろに 萩みる人

去年の秋や 忍ぶらん

爪音いづこ 歌聲いづこ

虫は野邊に 花は水に

(語例)

秋の野

秋草の花

八千草

千草

百草

千草百草

さまざま

かすく

いろく

桔梗かるかや

萩女郎花

秋萩

糸萩

野萩

白萩

萩さく庭

萩ちる水

萩の盛

萩園

風になびく

萩の錦

しだれ萩

色めく

藤ばかり

葛かづら

水引の花

紫苑

萩寺

水に垂れて

むらさき

さく女郎花

蒸したる粟か

葛の花

撫子

ほたる草

すゝき

露に靡く

枝たれて

くれなる

なまめく

をどこめし

真葛原

大和撫子

野菊

尾花

初すゝき

糸すゝき

招く尾花

露に紐とく

秋風わたる

風さびし

野あろび

片山かげ

秋の盛

初花すゝき

すゝき原

折れかへり

ぬれて咲く

風のゆくへ

風すゝし

ろいろあるき

道のへの

今ぞ時

花すゝき

穂にいでゝ

露おく

露の玉

風に波打つ

虫鳴く野邊

道のかたへ

垣根にほふ

秋は今

野邊ころ秋

秋は野に

おもしろや

菊の花

白菊

黄菊

籠の菊

庭の菊

菊の香

菊の露

菊の雫

菊の盃

菊の宴

あまる色香

星かあらぬか

星月夜

夕やみ

夕月夜

月の光

霜に傲る

花の弟

秋の形見

色香けだかき

つぼみ解く

ほころびて

八重一重

器 財

◎船筏

○海人の小舟

謠

曲

たもしろや 心あらん

人に見せばや 津の國の

難波わたりの 春のけしき

臈舟 こがれくる

沖の鷗 磯千鳥

つれだちて 友よぶや

海人の小舟 なるらん

○河瀬舟

都は人目 つゝましや

もしもろれかど 夕まぐれ

月もろともに 出でゝゆく

雲井百敷や

大内山の 山守も

同じく

かゝる憂き身は よも咎めじ  
木がくれて よしなや  
鳥羽の戀塚 秋の山  
月の桂の 川瀬舟  
こぎゆく人は 誰ならん

○掉の歌

掉の歌

うたふ浮世の 一ふしを

名波千鳥 聲ろへて

同じく



友よびかはす 海人乙女  
 恨みどまざる 室君の  
 行く舟や 暮ふらん  
 浅妻舟と やらんは  
 ろれは近江の 海なれや  
 秋も尋ね たづねて  
 戀しき人に 近江の  
 海山も 隔たるや  
 あぢきなや 浮舟の

同じく

棹の歌を うたはん  
 水馴棹の歌 うたはん

○此浦船

高砂や

此浦舟に 帆をあげて  
 月もろともに 出で汐の  
 波の淡路の 島かげや  
 遠く鳴尾の 沖すぎて  
 はや住の江に 着きにけり

(語例)

小舟	浮舟	捨舟
捨小舟	釣舟	海人小舟
棚なし小舟	一葉の舟	河舟
舟人	舟子	かこ
舟歌	棹の歌	舟ばた
舷燈	舟がゝり	舟ごまり
かゝり舟	ごまり舟	湊舟
苦ふく	苦うちおほふ	苦を敷寐

さをさす	みなれ棹	棹のしづく
櫓をおしつれて	こぎいづる	朝開き
湊を出づる	沖にいづる	波路を渡る
怒濤を凌ぐ	波を蹴て	五百重の波を
波路ゆく	海上千里	浮き沈み
ゆくへも知らず	八十島かけて	勇む舟子
波にたゆたふ	ゆたのたゆた	碇たろす
碇ぬく	碇あぐる	碇綱
旅泊の舟	万里の舟	知らぬ湊に

漕よせて	舟つけて	風待つ
日和まつ	波に逆らふ	追手吹く
うれしき追手	帆を張る	帆を上げて
帆を張りつれて	沖の白帆	白帆つらなる
真帆片帆	帆影かすみて	舟かげ遠し
をちかた舟	木の葉と見わて	雁かどばかり
沖の鷗か	船路のどけき	遠き船路
船路の雨	波上の月	凜船
船の烟	波間の煙	旗じるし

船じるし	遠洋	海上
船路	舷頭	汐風
波風	海原	青海原
わたの原	筏	筏さす
筏士	筏の棹	さしくだす
筏の上に	筏組む	ながす筏
朽筏	ふる筏	

わたの原波の花さく浦風に 木の葉も浮ぶ海人の釣舟(大平)  
すみだ川簀きてくだす筏士に 霞むあしたの雨をころ知れ(千蔭)

◎鐘

(作例)

○晚鐘

僧 辨 玉

あかねさす 日の暮れゆけば  
朝さらす 出づる山々に  
立ちかへり 雲は静まり  
ねぐらとめ 鳥は宿る  
入相の 鐘のひびきの  
何くより 聞ゆともなく

浮雲の ゆくへを追ひて  
村がらす 消ぬゆく跡に  
音の残れる

○鐘のおこ

大和田建樹

花より花に 分け暮れて  
かへる山路の 夕月夜  
霞ながれて 里は見えず  
鐘の音のみ 麓より

二

かすかに見ゆる ともし火は

星か螢か 二つ三つ

侍つらん母の 家はあれよ

急げや鐘の ひびく方に

○旅の暮

論 三三三曲

夢に寐て

うつゝに出づる 旅枕

夜の關戸の 明暮に

都の空の 月影を

さころと思ひ やる方も

雲井は跡に 隔たり

暮れ渡る空と 聞ゆるは

里近げなる 鐘の聲

○半夜の鐘

同 じ く

月落ち 鳥啼いて

霜天に満ちて すさましく

江村の漁火も ほのかに

半夜の鐘の ひびきは  
 客の舟にや 通ふらん  
 蓬窓雨 したゞりて  
 なれし沙路の 楫枕  
 浮寐ぞかはる 此海は  
 波風も しづかにて  
 秋の夜すがら 月すむ  
 三井寺の鐘ぞ さやけき

(語例)

鐘のね	鐘の聲	鐘のとと
鐘の響	鐘つく	鐘聞く
夜半の鐘	霜夜の鐘	寒夜の鐘
曉の鐘	明方の鐘	後夜の鐘
初夜の鐘	夕べの鐘	晩鐘
暮の鐘	入相の鐘	野寺の鐘
山寺の鐘	遠寺の鐘 <small>とんじ</small>	更くる夜
明けぬるか	枕にひびく	近し
遠し	旅人急ぐ	かへる山路

今日も暮れぬと	波にひびきて	雲の外に
無常の聲	かなしき聲	嵐の隙に
さねわたる	星見えろめて	消えゆく星
月影さねて	白みゆく	夜はほのく
森の中より	霞のをち	雨の夕べ
雨さむし	紅葉の奥	鐘樓 <small>しやうろう</small>
鐘つき堂	音すなり	響くなり
聲高し	かすかなり	今鳴る鐘
山彦	残る響	

紅葉ちる嵐の山の麓寺 秋のとぢめの鐘やつくらん(春門)  
 遠近に入相の鐘のおとすなり 山に入日も道いとくらん(桐麿)

◎國旗

(作例)

○千里の人

大和田建樹

漫々たる 青海原

鳥も飛ばず 島も見えず

心ぼろ わが心

友は皆すべて 千里の人

二

空につづく 波の上を

こなたさして 來たる煙

近づけば あなうれし

風に靡く 国旗の色

○紙の国旗

同じく

万歳と 聲々に

振りあろぶ 紙の国旗

今より宿る 大和心

あどけなき 子の胸に

(語例)

日の御旗

日章旗

朝日の御旗

日の丸

旗手

旗風

旗竿

旗持つ

旗さる

旗ふる

打ち靡く

風に靡く

旗のなびき

旗立てゝ

立てゝ祝ふ

軒毎に

家ごとに

門ごとに



万歳呼ばふ

君の御いつ

國の光

國旗のほまれ

君が代祝ふ

御代の榮

凱旋いはふ

かちいくさ

ひらめく

かゞやく

凱旋門

凱歌のこゑ

田舎まで

船の上

手ごとに振る

人事

◎旅

(作例)

○佐野の渡

謠

曲

信濃なる

淺間の嶽に 立つ烟

遠近人の 袖さむく

吹くや嵐の 大井山

捨つる身に無き 友の里

今ぞ浮世を 離坂

墨の衣の 碓氷川

くだす筏の 板鼻や

佐野の渡に 着きにけり

○旅人の夢

同じく

げにや雨降り 日も吳竹の

一夜を明かさせ 給へとて

はやこなたへと 夕露の

むぐらの宿は うれたくとも

袖をかたしきて

お泊りあれや 旅人

西北に 雲起りて

東南にきたる 雨の足

早くも 吹き晴れて

月にならん うれしや

ところは 住吉の

松吹く風も 心して

旅人の夢を さますなよ

(語例)

旅路

旅寐

旅枕

旅やどり

旅やかた

草枕

初旅

旅人

旅がたり

旅物語

旅寐の床

旅寐の夢

旅だより

旅の音づれ

旅の空

旅の暮

旅行の暮

旅立つ

朝立つ

立ちいづる

宿かる

宿とる

とまる

一夜ごまり

一夜の宿

たゞ一夜

たごる

わけまよふ

知らぬ道

たごる山路

鄙の長路

旅の長路

なが旅

旅衣

旅の衣

明け暮れて

明かし暮らして

いく夕ぐれ

夕べく

夜なく

夜ごとに

寐られぬまゝに

夢成りかねて

雲井のよう

雲のこなた

雲路かさなる

雲を分け

五百重のをち

八重の汐路

國をへだて

山こねて

野くれ山くれ

都を出で

家ばなれ

家を離れて

故郷はあとに

別れ来て

立ちいで	振り捨て	入る野の末
行末たごる	明けゆく	夜をこめて
遙けき旅	嵐車の旅	騎馬の旅
船路の旅	浮枕	浮寐
磯枕	波枕	月のこる
曉月夜	星月夜	磯づたひ
浦づたひ	島めぐり	行くほどに
行きくいて	打ち過ぎて	里過ぎて
旅だち	門出	鹿島立

宿りは何く	何くの方	友もなく
一人旅	行き暮れて	宿とりかねて
鐘のこる	木の間の光	をちの燈
心細くも	誰に語らん	春の旅
花の陰ゆく	霞む海山	胡蝶と共に
雲雀さゝつゝ	春雨	春風
夏の旅	朝すゝに	夕すゝに
百合さく山路	やすむ木陰	水を力に
むすぶ清水	日ぐらし	蟬なく

夕立

秋の旅

短き日影

くれやすき

日は早山に

鶉鳴く野

朝露しげし

霧にぬれゆく

菊さく頃

紅葉かさなる

秋くれて

秋も別れ

冬の旅

冬枯さびし

枯野の道

雪の山路

雪打ち拂ひ

雪の夕べ

霰ふる

氷る霜夜

衾も氷る

小笹の霜

うき旅

たのしき旅

夜ごもりに霞を分けて出で立てば

雉子きんぎょ鳴くなり朝倉の山(隆麿)

立ちよるも涼しかりけり古里の 野山に似たる松の小陰は(長直)  
我妹子が眉引なせる古里の 山のは見わて出づる月かな (尊澄)  
假寐せん影だにもなし一もとの 松さへ今は雪しづれして(良安)

◎散歩

(作例)

○そらろありき

大和田建樹

草を摘み 花をかさし

岡を越ね 川を渡る

たのしきは春の ろいろありき

あそぶ蝶も 友となりて

二

ほたる草 露にぬれて

すゞしげに 立てる姿

たのしきは夏の ろいろありき

水のおとも 友となりて

三

白菊は 垣に香り

薄紅葉 森にほふ

たのしきは秋の ろいろありき

風のこゑも 友となりて

(作例)

あくがれて

うちいで、

うかれいで、

家遠く

垣根づたひに

畔づたひ

田ん圃の道

田道

野道

野路

田舎道

田舎あるき

ろいろありき

遠く來ぬ

うかれ來ぬ

見かへれば	わが里は	右ひだり
あどさきに	友呼びかはし	先なる友
あどなる友	秋の日晴れて	春日のどかに
何くをさして	摘草しつゝ	花折りかざし
橋打ち渡り	堤の道を	花も咲きぬ
うれしや今日も	蝶々よ來れ	雲雀よ歌へ
つかれて休む	村里すぎて	松原すぎて
松原つゞき	鳥居のあるは	簑には椿
れんげの盛	風もなし	雲もなし

日も暖に	渡しに乗りて	渡し舟
渡し場	海見にゆかん	城見にゆかん
近くの野邊	山寺近し	名所見て

◎音楽 歌舞

(作例)

○かたみの琴

大和田建樹

我母は 何くに行きし

手に觸れし 琴を見すて

我母は 何くに行きし

弾き馴れし 琴を殘して

塵拂ふ 人もなければ

聲絶えて 日は重なりぬ

二

片言に くりかへしたる

我歌を 汝も忘れじ

ほゝるみし 母の面影

汝が面に 今も移れり

なつかしき 指に彈かれて

動きしは あはれ此糸

三

壁に立ち 残れる琴よ

もろともに 汝も忘れじ

朝夕に 向ひし影を

目にあまる 愛の光を

花も散れ 鳥もよし鳴け

我母の 歌聲かへせ



四

月白し 空おもしろし

我目には 霧ころかゝれ

春も来ぬ 山も笑ひぬ

秋胸は 氷ぞ解けぬ

いかにせん 母なき宿を

いかにせん 聲せぬ琴を

○想夫戀

謠

曲

男鹿鳴

この山里と ながめける

嵯峨野の方の 秋の空

さころ心も 澄み渡る

片折戸を するべにて

明月に鞭をあげて

駒を早め いろがん

賤が家居の 假なれど

もしやと思ひ こゝかしこに

駒を駆け寄せ 駆け寄せて

ひかへく、聞けども  
 琴ひく人は なかりけり  
 月にやあくがれ 出で給ふと  
 法輪に まるれば  
 琴こそ聞わ 來にけれ  
 峰の嵐か 松風か  
 うれか あらぬか  
 尋ぬる人の 琴の音が  
 樂は何ぞと 聞きたれば

同じく

夫を想ひて 戀ふる名の  
 想夫戀なるが うれしき  
 ○ばらりからり  
 翁おきなは琵琶を 給はりて  
 姥は琴柱を 立て並べて  
 撥音はちおと 爪音つまおと  
 ばらりからり からりばらりと  
 感涙もこぼれ  
 嬰兒えいじも躍る ばかりなりや

弾いたりく たもしあや

○舞の袖

同じく

あるひは

天つみろらの 緑の衣

又は春立つ 霞の衣

色香も妙なり 乙女の裳裾

左右左左右 颯々の

花をかざしの 天の羽袖

靡くもかへすも 舞の袖

(語例)

おんがく

樂の聲

樂のしらべ

樂を奏す

糸竹

糸竹呂律

管絃

笛つゝみ

琴笛

笛の音

笛竹

笛のしらべ

吹きすすぶ

吹く笛

横笛

神樂笛

柴笛

草刈笛

樵歌牧笛

琴の音

ひく琴

妻琴

玉琴

手ならず琴

筑紫琴	一絃	二絃
琴の緒	琴の糸	琴の爪
琴柱	琴板	琴歌
つまたと	しらべ	音色
かきひく	かきなす	琵琶
琵琶の音	ひく琵琶	打つ鼓
鼓の聲	太鼓のとほろき	神樂の太鼓
舞樂	うたまひ	舞のかなで
舞人	舞姫	舞曲

舞の袖	袖をかへす	袖うちふる
袖をかざす	かざしの花	舞ひ遊ぶ
歌ひ舞ふ	立ち舞ふ	舞ひ出づる
舞ひをさむる	歌ごゑ	歌人 <small>うたびと</small>
歌のしらべ	うたふ歌	歌の曲
歌たもしろし		

◎送別

(作例)

○海外留學生を送る

大和田建樹

富士の嶺を 高さ山とは  
いにしへの 人ころいへれ  
みちのくを 遠き國とは  
日の本の 人ころいへれ  
比馬拉亞の 雲を仰がば  
富士の嶺も 低くぞならん  
太平洋 渡りかへらば  
みちのくも 近くぞならん  
君は今 ものまなびすと

るの境 踏みにぞいゆく  
いづかたに 船は果つらん  
風あらさ 汐の八百路を  
浮き沈み こぎゆく時は  
亞米利加の 國見いだし  
るのかみの 人か戀ふらん  
雪深さ 山また山を  
登りおり 分けゆく時は  
北の國に 軍すゝめし

大丈夫の世か忍ぶらん  
 たもしろの君が旅路や  
 たのもしの君が門出や  
 立たば立て 沖つ汐風  
 吹かば吹け 高嶺の嵐  
 居ながらに 龍のあぎとの  
 玉は得べしや  
 ○人の別れに  
 一年は 射る矢の如し

海野遊翁

年月は たゞ束の間ぞ  
 しかばかり 常は短く  
 いとゞしく 早き月日を  
 時鳥 鳴くや五月に  
 今はとて 君し立ちなば  
 立ち歸り たはせん頃を  
 いつしかと 指折り數へ  
 年月の 過ぐる遅しと  
 待ちか渡らん

(語例)

立ち別れ	別れゆく	別れての
わかれ路	遠き別れ	君の別れ
今日の別れ	はるくくと	道遠く
雲井のよろ	雲のあなた	海のあなた
波路へだて、	千里の旅	千里の外
かさなる山	はてなき海	ゆけや君
平らかに	つゝがなく	春の日に
長き日に	もろともに	打ちつれて

(作例)

◎祝の歌

うらやまし	跡追ひて	花見つゝ
月見つゝ	知らぬ海山	遠き境
神の守り	神にぞ祈る	ゆく船の
出でゆく船の	船路経て	いつ逢はん
逢ふまでの	歸り來ん日	月日は早し
月日遙けし	指折りて	手を取りて
思ひ出でよ	忘るなよ	

○奉迎

大和田建樹

皇太子殿下の横須賀に行啓あらせられし時。

一

富士の高嶺に 雲もなく

御威あまねき 春の風

今日わが君の 行啓を

迎へて歌はぬ 松もなし

二

文武の徳は 昇る日の

光ととも 世に満てり

今日わが君の 御車を

迎へて歌はぬ 山もなし

三

歌へや歌へ 横須賀の

磯うつ波も 諸共に

今日わが君の いでましを

迎へて千代に 萬代と

○卒業式にて

同じく



橘かをりて 月に鳴く時鳥

五月は來にけり 山にも野邊にも

晴間を待ち得て いざ植るよ早乙女

白露の 玉苗を

四方に満ちわたる 小山田の水の色

世は唯ゆたかに 世は唯のどかに

二

卯の花ほころび 谷川に飛ぶ螢

五月は來にけり 水にも陸にも

菅笠ならべて 里人は出でゆく

親も子も 田植に

空を轟かす 君が代の歌の聲

はやあの木かげに はやあの麓に

(語例)

千代八千世

千代に八千代に

千代呼ぶ聲

千代呼びかはす

千代よろづよ

君萬歳と

萬歳となへて

萬歳三呼

君を八千代

御代の榮わ	榮ゆく御代	治まる御代
開くる御代	千代の一時	君を祝ひて
君の御いつ	御いつかゝやく	國威を四方に
國の光	國のほまれ	ほまれある國
わが日の本	國富みて	神のめぐみ
神のまもり	神徳ながく	豊秋津島
瑞穂の國	龜の齡	鶴の齡
松のときはに	ときはにまわれ	かはらぬ契
巖の如く	巖とならん	動かぬ國

ゆるぎなき	海より廣く	天地ながく
天ながく地久しく	濱の眞砂の	さく花
梅が枝	百よろこび	歌へく
歌へや共に	祝へ歌へ	歌聲立て
聲々に	いざ共に	我も祝はん
君が代祝へ	祝ふ心	千代の始め
千年の春	曇らぬ光	
春日野に若菜つみつゝ萬代を	祝ふ心は神ぞ知るらん	(素性)
君が代は千代ともさゝじ天の戸や	出づる月日の限なければ	

◎哀の歌

(後成)

(作例)

○一片の雲

路曲

花の跡とふ 松風や

雪にも恨 なるらん

是は青墓あははかの長者にて候あはれ

ろれ草の露 水の池

はかなき心の たぐひにも

あはれを知るは 習なるに

これは殊更 思はずも

人の嘆きを 身の上に

かゝる涙の 雨とのみ

しをるゝ袖の 花すゝき

穂に出だすべき 言の葉も

泣くばかりなる 有様かな

光の陰を 惜しめども

月日の數は 程なりて

雪の内 春は來にけり 鶯の

氷れる涙 今は早

解けても寐ざれば 夢にだに

おん面影の 見ねもせで

痛はしかりし 有様を

思ひ出づるも あさましや

不思議やな此御墓所へ我ならでは。七日々に参り。御跡とむらふ者もなきに。旅人と見ねさせ給ふ御僧の。涙を流し懇にとむらひ給ふは。如何なる人にてましますぞ。

僧「さん候これは朝長の御ゆかりの者にて候ふが。たん跡とむらひ申さんため是まで参りて候。

女「たん縁とはなつかしや。さて朝長の御ため如何なる人にてましますぞ。

僧「是は朝長の御めのと何がしと申す者にて候ひしが。さる事有つて御暇たまはり。

はや十箇年に餘り。かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り。おん跡とむらひ申したくは候ひつれども。敵怨あんでほのゆかりをば。出家の身をも許さねば。抖擻とらふらんぎや行脚に身をやつし。忍びて下向仕

りて候。

女「さては取り分きたる御なじみ。さころは思しめすらめ。わらはも一夜の御宿りに。あへなく自害し果て給へば。たゞ身の嘆きの如くにて。かやうに吊ひ参らせ候。

僧「げに痛はしや 我とても

もと主従の たん契

是も三世の たん値遇

女「わらはも一樹の 陰の宿り

他生の縁と 聞く時は

げに是とても 二世の契の

僧「今日しも互に こゝに來て

女「とむらふ我も

僧「朝長も

地「死の縁の

ところは合に 青墓の

跡のしるしか 草の陰の

青野が原は 名のみして

古葉のみの 春草は

さながら秋の 淺茅原

荻の燒原の 跡までも

げに北邨の 夕烟

一片の雲と なりきなし

空は色も かたちも

なき跡ぞあはれ なりける

○亡き友

大和田建樹

一

机をならべて 讀みし此書

塵ばみ残れど 人は歸らず

あなかなし

二

隔てぬ窓にて 聞きし鶯

今年も來鳴けど 春は歸らず

あなかなし

三

残れる面影 夢かうつゝか

歌ひし唱歌も 今は聞えず

あなかなし

(語例)

かなしき別れ

別れし友

消えし人

ゆきし人

かへらぬ道

かへらぬ人

歸らぬ水

水の泡

泡と消えし

雪と消えて

あわ雪

浮雲

浮き立つ雲

はかなき身

もろき命

露の身

露の世

草葉の露

露より先に

遠き旅路

黄泉路よみぢ

冥途の旅

死出の山

三途さんずの川

三つ瀬川

あの世

この世

今はの際

今はの詞

のこす詞

形見

形見の文

形見の琴

たもかけ

なほ目の前に

言の葉耳に

亡き人

亡き友

亡き影

亡き父母

世に亡き

うせにし人

亡き靈

玉の緒いとの

亡き跡

跡とふ

とむらふ

香の烟

手向の花

手向の水

おくつき墓事の

墓のしるし

跡のしるし

しるしの石

塚石

古塚

苔むす石

佛の名

讀經の聲

墓まうで

寺まうで

野邊わくり

今はの送り

烟となる

土となる

石となる

あはれさ

かなしさ

たつる涙

涙の瀧

涙の泉

袖しぼりつゝ

世は夢か

夢中の夢

夢の世

諸行無常

生者必滅

鐘の聲

御寺の鐘

末の露本のしづくや世の中の たくれ先だつ始なるらん (遍昭)  
ながめても此世の空とたばねぬは 子に別れたるあしたなりけり

(景樹)

◎陸戦

(参考)

○今井の四郎

謠

曲

弓馬の家に 澄む月の



わづかに残る 兵の  
 七騎となつて 木曾殿は  
 この近江路に 下り給ふ  
 兼平瀬田より 参りあひて  
 又三百 餘騎になりぬ  
 その後合戦 たびくにて  
 又主従二騎に 討ちなさる  
 今は力なし  
 あの松原に 落ちゆきて

わん腹召され 候へと  
 兼平すゝめ 申せば  
 心ぼろくも 主従二騎  
 栗津の 松原さして 落ち給ふ  
 兼平申すやう  
 うしろより わんかたき  
 大勢にて 追つかけたり  
 防矢 つかまつらんとて  
 駒の手綱を かへせば

木曾殿御誼 ありけるは  
 多くのかたきを 遁れしも  
 汝なんぢ一所いっしょに ならばやと  
 所存ありつる 故ぞとて  
 同じく かへし給へば  
 兼平また 申すやう  
 こは口惜しき 御誼かな  
 さすがに 木曾殿の  
 人手にかゝり 給はん事

末代の たん耻辱  
 唯おん自害 あるべし  
 今井もやがて 参らんと  
 兼平に 諫められ  
 また引つ返し 落ち給ふ  
 ころは正月せつきの 末つかた  
 春めきながら さねかへり  
 比叡の 山風の  
 雲ゆく空も 吳はとり

あやしや 通路の  
 する白雪の 薄水  
 深田に馬を かけおとし  
 引けども あがらず  
 打てども行かぬ 望月の  
 駒のかしらも 見ればころ  
 こは何とならん 身の果  
 せんかたもなく あきれはて  
 此まゝ自害 せばやとて

刀に手を掛け 給ひしが  
 さるにても 兼平が  
 ゆくへ如何にと 遠方の  
 跡を見かへり 給へば  
 何くより 來りけん  
 今ぞ命は 槻弓の  
 矢一つ きたつて  
 内兜に からりと入る  
 痛手にて ましませば

たまりもあへず 馬上より

遠近の 土となる

\* \* \* \*

兼平は かくぞとも

知らで戦ふ 其ひまにも

御最期の 有様を

心にかくる ばかりなり

さて其後に 思はずも

敵かたきの中に 聲立て、

木曾殿討たれ 給ひぬと

呼ばゝる聲を 聞きしより

今は何をか 期すべきと

思ひ定めて 兼平は

これぞ最期の 高言と

鎧ふんばり 大音あげ

木曾殿の御内に 今井の四郎

兼平と 名のりかけて

大勢に 割つて入れば

もとより一騎 當千の  
秘術をあらはし 大勢を  
粟津の汀に 追つ詰めて  
磯打つ波の まくり切り  
蜘蛛手 十文字に  
打ち破り かけ通つて  
其後自害の 手本よとて  
太刀をくはへつゝ 逆様に落ちて  
つなぬかれ 失せにけり

兼平が 最期の仕儀  
目をおどろかす 有様なり  
目をおどろかす 有様

○追手搦手

同じく

さる程に 味方の勢  
六万餘騎を 二手に分けて  
範頼義經の 追手搦手の  
海山かけて 須磨の浦  
四方を圍みて 押し寄する

魚鱗鶴翼も かくばかり  
 うしろの山松に 群れるるは  
 残りの雪の 白たへに  
 ねぐらを立たん 眞鶴の  
 翼を連ぬる 其げしき  
 雲にたぐへて ねびたし  
 浦には海人 さまぐの  
 漁夫の舟影 數見わた  
 漁たく火も かげろふや

嵐も波も 須磨の浦

野にも山にも こぎよする

兵船は さながら

天の鳥船も かくやらん

(語例)

ものゝふ

つはもの

大丈夫

ますら猛夫

勇士

勇將

勇卒

武將

將士

將卒

大將

將軍

たゝかふ	射むかふ	干戈まじふる
矢あはせ	矢びらき	矢叫び
交戦	血戦	激戦
苦戦	陸戦	野戦
馬上の戦	一騎打	騎兵
馬立てゝ	駒乗り進め	軍馬の嘶き
勇める駒	駈け寄する	千軍万馬
彈丸	硝烟彈雨	飛びくる彈丸
彈丸雨飛	矢玉の霰	矢玉の中

砲聲とゞろき	天地とゞろき	山も崩るゝ
雷火	落つる雷	打ち出だす
とさの聲	勝どき	凱歌
萬歳呼ばふ	大勝利	かちいくさ
我こそ勝ちたれ	連戦連勝	勝利は我に
なびく國旗	國旗は城に	日の御旗
聯隊旗	戦場	軍の庭
敵の砦	城は堅し	堡壘
とりで飛び越ね	突貫	一齊射撃

敵兵幾万	數万の敵	入り亂れ
劍の光	腰の劍	日本刀
やまと劍	國のため	君のため
捨つる命	命捧げて	屍踏み越へ
喇叭の聲	進軍喇叭	進めや進め
進む我軍		

◎海戦

(参考)

○船いくさ

謠

曲

ろの船いくさ 今は早  
 閻浮えんぶに歸る 生き死にの  
 海山一同に 震動して  
 船よりは 閃の聲  
 陸くがには 波の楯  
 月に白むは 劍の光  
 潮にうつるは 兜の星の影  
 水や空  
 空ゆくも又 雲の波の



打ち合ひ 刺し違ふる  
 船いくさの かけひき  
 浮き沈むと 見し程に  
 春の夜の 波より明けて  
 かたきと見わしは 群れゐる囀  
 関の聲と きこわしは  
 浦風なりけり 高松の  
 朝嵐とぞ なりにける

(語例)

波の上	あら波を	白波に
沖つ波	船の上	船と船
敵の船	乗り近づけて	乗り出だす
砲門開く	たゝかふ	船いくさ
海の戦	戦なかば	打ち沈め
あるひは轟沈	敵艦波に	敵の艦隊
寄せくる船影	轟く砲聲	飛びくる砲弾
砲火の稻妻	荒波蹴立て	波逆卷きて
波湧きかへる	龍怒る	しづげき海上

海上くらく

月くらし

雨くらし

星影一つ

曇る夜の

水雷艇隊

水雷波を

射出たす水雷

水ゆく雷

うれしや命中

わが旗艦

旗艦を目當に

逃げゆく敵艦

海國男兒

日本海軍

来らば来れ

襲はゞ襲へ

凱歌の響

海軍勝ちたり

名譽の海軍

君の御いつ

海のはまれ

古今に稀なる

人物

◎乙女

(作例)

○薬ごり

大和田建樹

北風あれて 寒き日に

足袋をもはかで 急ぐ乙女

手に何やらん 提げたるは

薬取りての 歸るさか

二

雪はちらく 降り來り

ろけし髪に 花ささぬ

拂ひもあへず 走せゆくは

病み伏す母や 待ちぬらん

(語例)

をどめ子

おとこひ

姉いもと

妹は十二

三五の齡

つばみの花

初花櫻

未來の春

ひく琴

琴習ふ

文字書く

唱歌の聲

すみれ摘む

花折り持ちて

花摘みかざす

たばねし花

野邊ゆく乙女

衣縫ふ

針を手取る

かしこき子

孝ある乙女

なつかし

うつくし

愛らし

花のごと

月の顔ばせ

笑まひ

笑顔

たもかげ

鶯さく

鳥に水やる

草に土かふ

貝ひらふ

若葉つむ

羽子つく

鞠もてあろふ

舞ふ袖

裾引く庭

誰が子

柴かる乙女

田植する子

花賣る乙女

◎友

(作例)

○つはものゝ交り

謠

曲

つくぐと

春のながめの さびしきは

忍ぶに傳ふ

軒の玉水 音すこく

獨ながむる 夕まぐれ

伴なひ語らふ 諸人に

御酒をすゝめて 盃を

とりぐなれや 梓弓

彌武心の 一つなる

つはものゝ 交り

頼ある中の 酒宴かな

○友の文

大和田建樹

家を雲井の ようにたきて

獨ものたもふ 旅寐の床

月も言はず 露も言はず

うれしきは 友の文

二

夜半の鐘の音 空に消れて

涙かたしく 旅寐の夢

誰に語り 誰に告げん

なほ残る 友の聲

(語例)

友だち

友がき

友の睦び

隔てぬ友

親しき友

心へだてぬ

心を置かぬ

疎からぬ

はらからなす

心の友

誠の友

昔の友

篤の友

童の友

幼時の友

まじはる

むつぶ

うるはしむ

したしむ

相思ふ

思ひかはす

かたらふ

忘れぬ

助けあふ

互に心を

月に花に

よきにあしきに

うちつれて

諸共に

同じ心に

別るとも

つれゆく雁

友千鳥

友鳥

友燕

友鶴

友鳥

友の家

友の門

友の言葉

友の情

◎樵

(作例)

○谷の川音

謠

曲

山路に日暮れぬ 樵歌牧笛の聲

人間万事 さまじくの

世を渡り行く 身の有様

物ごとに遮る 眼の前

光の陰をや 送るらん

あまりに山を 遠く来て

雲また跡を 立ち隔て

入りつる方も 白波の

谷の川音 雨とのみ

きこわて松の 風もなし

げにや あやまつて

半日の 客たりしも

いま身の上に 知られたり

○春の月

のどかなる 春の山路に

咲く花を 見てやたくれし

僧

辨

夕月を 待ちてや暮れし

真柴負ひ 歌ひつれくる

山賤が 聲すなり

家路とめ 今かへるらし

里さして 今かへるらし

真柴負ひ 歌ひつれくる

山がつが 聲すなり

(語例)

山びと

柴びと

木こり

柴かる	木こる	薪こる
薪どる	薪ひろふ	薪たふ
せたふ薪	こり積む薪	柴どる道
負ひつれて	背おひて歸る	歸るさ
月踏み歸る	歸る山路	夕月夜
月いで、	歸さおくる、	歌ひて歸る
木こりの歌	樵歌 <small>せうか</small> のこる	樵路に通ふ
花を薪に	妻木にろへて	道の早蕨
蕨を折りて	花の陰	松陰

山また山	雲に分け入る	休む木陰
手に取る斧	斧の響	斧のわと
長さ日ぐらし	今日も暮れぬ	深山の奥
友なき山	山の静けさ	山の中
谷の流れ	谷におりて	つゝらをり
峰に聲あり	心のどかに	春日うらゝに
すゝしき山路	短き日影	紅葉の陰
時雨にぬれて	薪もぬれて	雪を薪に
雪を背負ひて	笠もうもれて	雪白し



かへるは雪 霜ふむ道 山路の霜

いたゞく星 麓にくだる 家路に急ぐ

いざや歸らん 山路くだらん

山がつと人はいへども時鳥 まづ初聲は我のみぞ聞く(是則)

◎海人

(作例)

○釣の營み

諸 曲

釣のいとなみ いつまでか

隙も波間に 明け暮れん

棹さし馴るゝ 海人小船

渡りかねたる 浮世かな

風歸帆を送る 萬里の程

江天渺々として 水光平らか

舟子は解く是れ 明朝の雨

面白や頃しも今は 春の空

霞の衣 ほころびて

峰白妙に 咲く花の

嵐もにほふ 日影かな

賤しき海人の心まで  
 春ころのどけかりけれ  
 花ささるふ  
 比良の山風吹きにけり  
 こぎゆく舟の跡見ゆる  
 鳩の浦わもはるくごと  
 霞み渡りて天つ雁  
 歸る越路の山までも  
 ながめに續くけしきかな

○汲むは影

同じく

いざく／＼沙を汲まんとして  
 汀に満干の沙衣の  
 袖を結んで肩に掛け  
 汐くむためとは思へども  
 よしろれとても女車  
 寄せては歸る瀉を無み  
 芦邊の田鶴ころ立ち騒げ  
 四方の嵐も音ろへて

夜寒なにと 過さん  
 更けゆく月ころ さやかなれ  
 汲むは影なれや  
 焼く鹽烟 心せよ  
 さのみなど 海人びとの  
 憂き秋のみを 過さん  
 松島や  
 雄島の海人の 月にだに  
 影を汲むころ 心あれ

○あびさ

同じく

名にしおふ 難波津の  
 歌にも 大宮の  
 内まで聞ゆ あびさすと  
 あご調ふる  
 海人の呼聲と よみたける  
 古歌をも 引く綱の  
 月の前にみえたる 有様  
 あれ御覽せよや 人々

(語例)

あまの里	あまの子	あま乙女
海人の里	海人の家居	海人の苦屋
海人小船	海人衣	汐衣
汐馴衣	汐汲む海人	汐焼く海人
汐くみ衣	汐やき衣	藻鹽焼く
藻鹽草	藻鹽木	鹽釜
鹽屋	海人の鹽屋	鹽屋の烟
海にいづる	釣にいづる	釣垂る、

鯛つる	櫻鯛	鯉つる
鯉舟	釣舟	釣の糸
釣竿	釣人	網引く
あびき	あびきの船	網舟
地引あみ	大網	四手あみ
網張る	網子 <small>あこ</small>	海人の呼聲
舟人	舟子	船たしつれて
得物をのせて	海を家なる	波間にくらす
いさみて歸る	櫓こる揃へて	いさり舟

いさり火

すなごる

波あれて

海あらし

風さむし

こぎかへる

帆を張りて

真帆片帆

船待つ妻

磯に立ち

渚に出で

あわびとる

水底に

若和布刈る

浮和布

海松和布

貝ひろふ

蛤ひろふ

波のぬれ貝

梅の花貝

さくら貝

月日貝

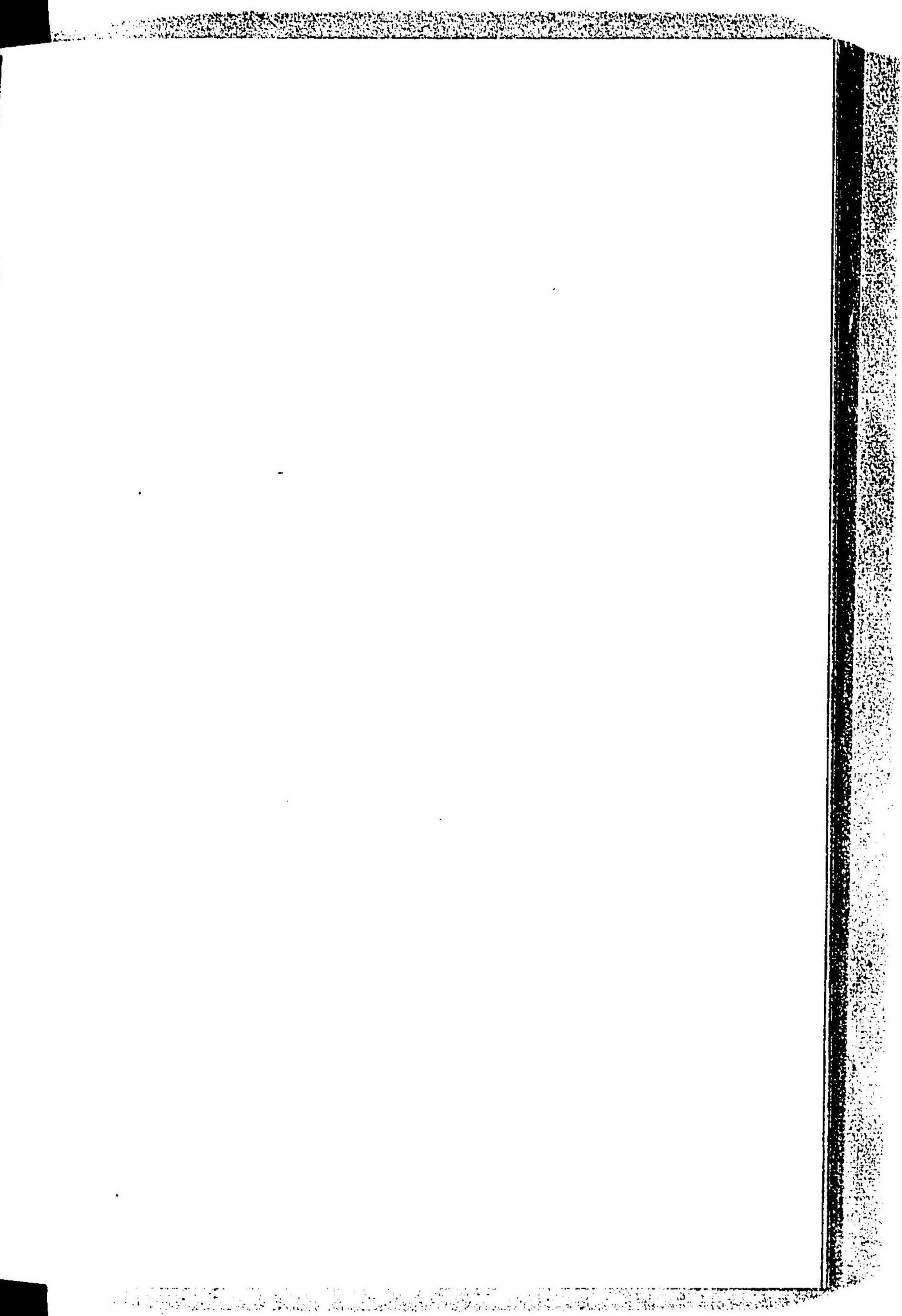
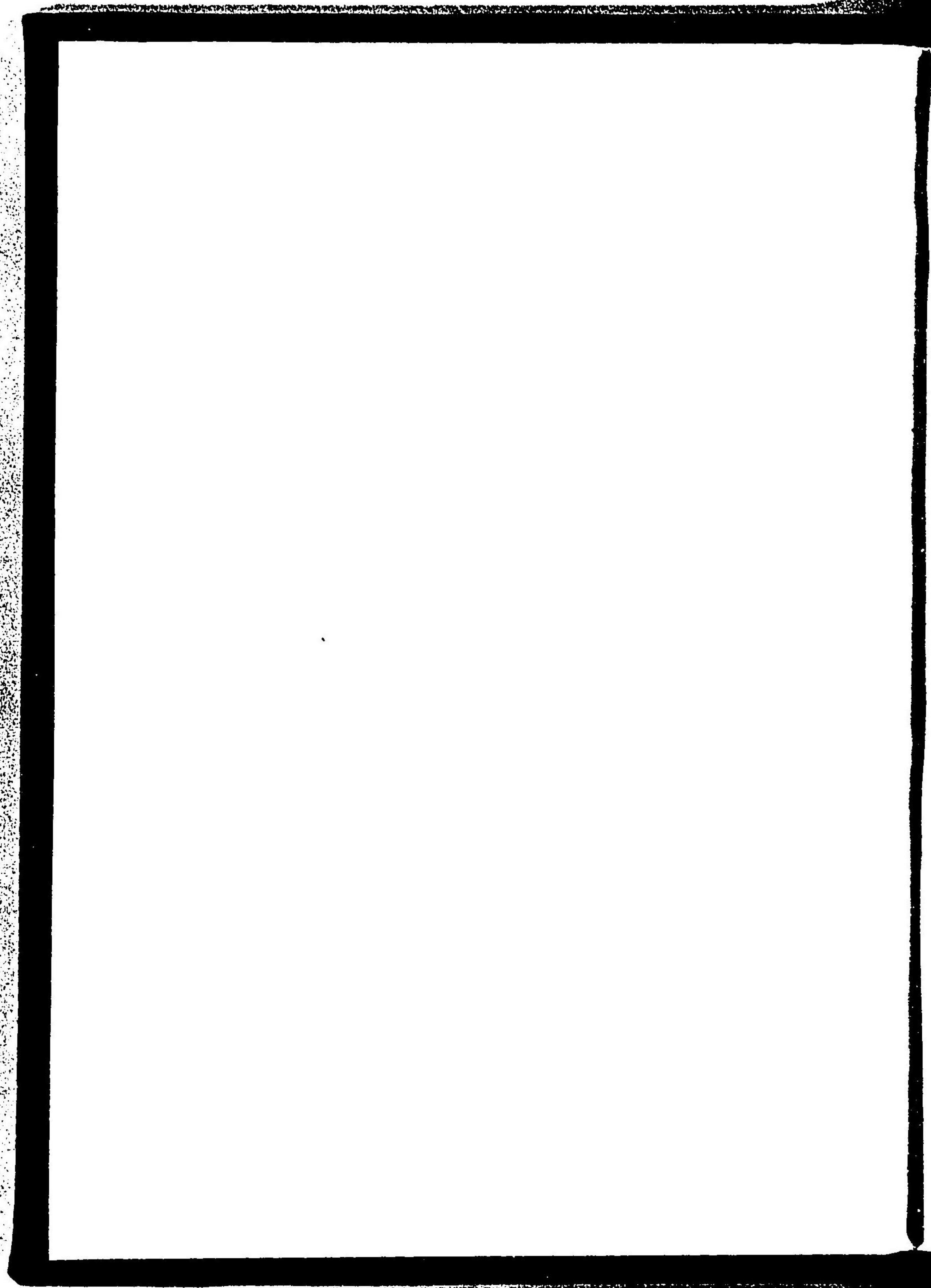
磯打つ

海老すくふ

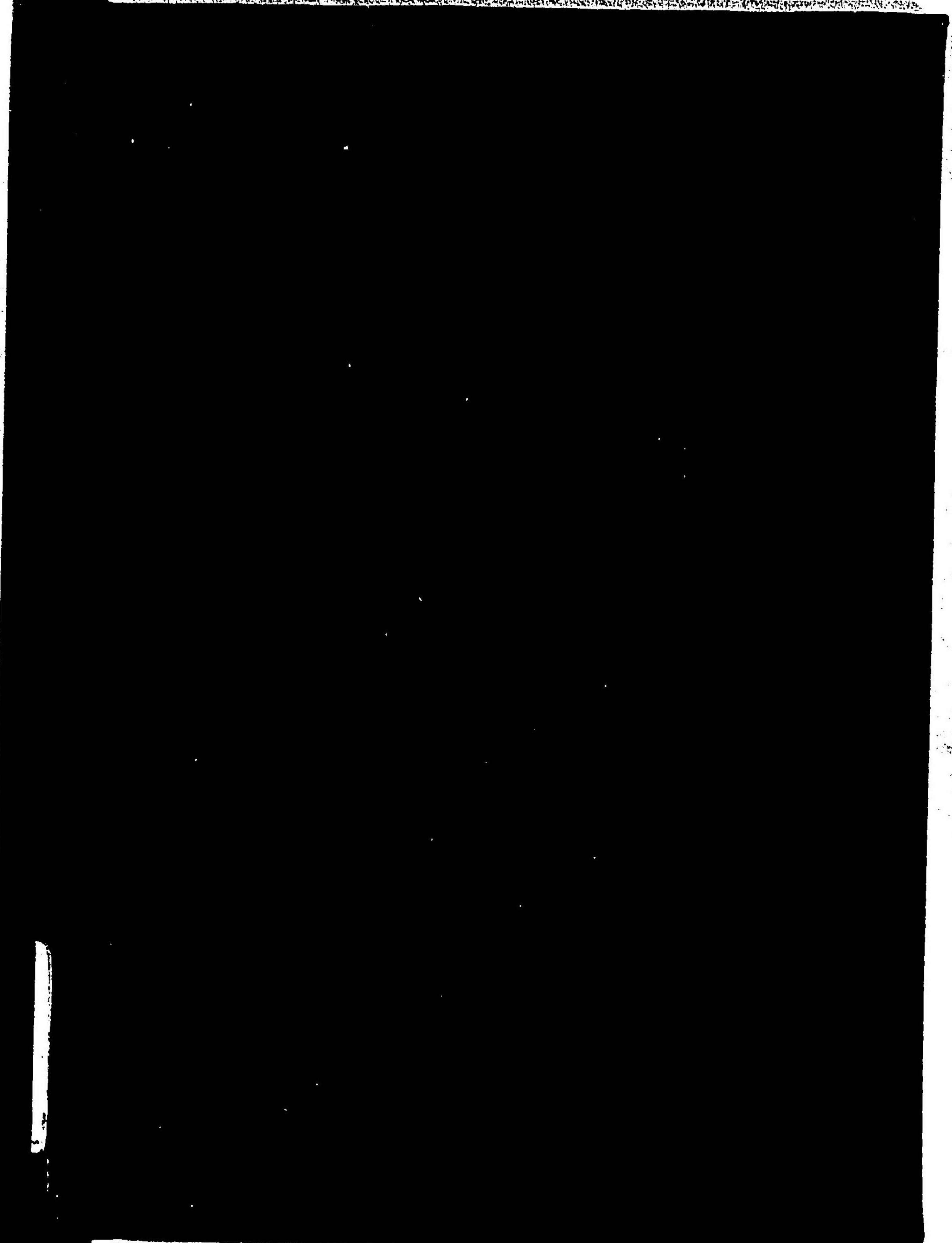
磯路

浦路

濱路



[Redacted]



[Redacted]

94  
453

088027-000-4

94-453

新体詩早学び

大和田 建樹 / 編

[M39?]

DBG-0124





